

## 学術情報流通におけるオープンアクセスの実態 — 『筑波大学心理学研究』掲載論文の引用調査から —

大原 司

研究者は、研究の上で学術雑誌の利用を欠かすことができない。1980年代から学術雑誌の価格高騰が問題視され、論文の電子的な普及と相まって、研究結果などをインターネット上に無料で公開するオープンアクセス（以下、OA）が提唱された。2013年度から博士論文をOAにすることが義務付けられるなど、OAは近年では不可避の動きとなっている。

OAについて、研究者のその理念の認知や利用経験の有無などを明らかにする調査が海外、国内で行われてきた。その結果、国内研究者のOAの認知度やOA資料の利用経験は経年的に増加していることが明らかになった。一方で、OAの進展状況は必ずしも明らかではない。これについて、倉田はOAの未浸透を指摘している。海外の生物医学分野についてOAの進展状況を明らかにしたKurataらによる調査では、前年度に刊行された論文がどの程度OAとして公開されているかを2006年、2008年、2010年に調べている。その結果、OA論文の割合は経年的に上昇しており、論文の電子化も進んでいることがわかった。

本研究では、2010年に認知・利用経験の調査がなされている国内の心理学分野を対象に、OAの進展状況を明らかにすることを目的とする。

研究方法として、『筑波大学心理学研究』掲載論文の引用文献を対象にタイトルと著者名でGoogle検索を行い、上位20件までに登場したOAのそれぞれの実現手段を記録する手法を選択した。個々の論文のOA実現手段の中で最も公開日の早いものを記録し、その論文を引用した『筑波大学心理学研究』掲載論文の刊行日と比較する。これにより、『筑波大学心理学研究』各号刊行時点でのOAの進展状況を明らかにする。対象となるのは、『筑波大学心理学研究』1から45号掲載論文の引用文献15,580本のうち、2006年以降刊行の『筑波大学心理学研究』31から45号掲載論文が引用する紀要を含む日本語雑誌論文（以下、引用論文）で、1,109本である。

調査の結果、引用論文1,109本のうち、2013年12月現在OAで入手可能なのは681本であった。2006年から2013年までの各年で、『筑波大学心理学研究』刊行時にOAで入手できる引用論文の割合は、11.3%、5.8%、11.2%、14.9%、24.1%、23.8%、28.6%、40.7%である。例外はあるが、概ね経年的にその割合は増加している。従って、日本の心理学分野におけるOAは進展してきたと考えられる。また、OAの実現手段として最も多いのは、CiNiiやJ-STAGEでの公開を含むOA雑誌で、次いで機関リポジトリ等による公開であった。

本研究では紀要と学術雑誌を区別せずにOA論文の公開状況の調査を行い、その結果紀要を含む雑誌論文のOA論文の割合が明らかになった。しかし、学術情報流通において両者の果たす役割は大きく異なるため、今後はその区別を行ったうえで調査を行うことが求められる。

（指導教員 逸村 裕）